続千載和歌集

下之一

853
166

類 和歌
函號 一条 七八
書名 二十一代集
冊數 五六

第七一三

国立国会図書館　　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

渡邊千秋藏書
帝國圖書館藏
購入 九、一、五

続千載和歌集巻第十一

恋歌一

女につかはしける　兵部卿元良親王

あまくものはるかにみえし峯よりも高くそ君を思ひ初てし

久安百首歌に　皇太后宮大夫俊成

思ふからやかて心はうつりゆく色はみえたる袖にこそあれ

家乃百首歌合に初恋

後京極摂政前太政大臣

しられしな我なき事や歎くらんゆかりたにかゝる袖の露かは（な）

不審

嘉元百首歌奉りしにおなし心を

権中納言公雄

限あれは今日の雨ふる袖さへもおりゐぬれかくはこひし

初尋縁恋といふ事を　法皇御製

忍ふは袖の心の色なれやむらさきの草はゆかりに露そかゝれ

百首歌めされしついてに

出る川お（と）の瀬はあめもしゆきかす人の出るとき

恋の歌の中に　圓光院入道前関白太政大臣

知られぬ涙は袖にあまりけれてつゝむかねて袖やしほらん

百首歌奉りし時　前右大臣

万十四
出るのへまのめてと
に後けとめへて
しとらまきるら

おしへすハ月後らし雲れハいかなるうらにつけよとためしの
袖哉

藤原為房朝臣

浪かゝる袖にそれぬる道なれくの露りもあらぬ中河乃
ら

弘長内裏百首哥に寄火恋

大納言為氏

さらぬたにかのめさへやうたも人わかくさやのすゝの思ひは
もえしらす

藤原盛徳

煙にはなれもいあらし海士のたく藻塩のけふりむせふ
らむ

前参議實俊

かゝりたにゝへすみそろかのやのあさく煙あハたゝるみゝ
ゝと

藤原宗緒朝臣母

おもはへき浪しきかけの（和名式ア）付思れ（古）かるきれまらの後思我忘花けさん
めく

藤原重顕

あらはしと思ふなや心くゝ人のよそ山ろ多ま絹ん

嘉元百首哥奉りし時恋

昭慶門院一條

えんよさく思ひ川へきあふさる（古）うハ川の下まよひ絶
まし
おもひそめしを

昭訓門院春日

せきとめしぬれつゝめ我袖に思ひはつ人を淀なりけ
ると

春日社へ詠て奉りし卅首歌中に

前大納言為世
ふかき心をいはゝましるみさはしのひし袖そぬれける

弘安百首歌奉りける時
典侍親子朝臣
涙をもあたにうつさし我袖にかゝる人の名もをしけれは
しらせそ

式乾門院御匣
年をへて我のみしのふは紅の袖にふりぬる涙なりけり

千五百番歌合に
前大納言忠良
人しれぬおもひはふかくうちすてゝも色にかゝるはかりしかりけり

百首歌奉りし時
前右大臣
人しれぬ思ひにあまる涙こそ色に出ぬへきしるへなりけれ

恋の歌の中に
中宮宣旨
押ふる涙を人にしられてはをさふる袖の色のかひなくも

従三位為子
枕にもしられてそ今はぬる夜くもあれ人めかりをせめてつゝ
まん

賀茂師久
逢さりし思をなにゝしむるかけくも人はしらし物ゆへ

平親清四女
恋しともいはぬに落る涙をは袖より外にしる人そなき

平重村

ガラス使用

持ちそんほとはしらぬ袖にふかく涙にしのひし人にしられ
る身こそ（お）をさふる袖にあまるも我ならいかゝ人にもらさん
権律師兼性
寄郭公恋といふことをよめる
惟宗光吉
我袖の（古）なみたさへなき郭公なくねはそれにかはらさりけり
寄雲恋を　従三位為信
人しれすよの中の思ひそれにたとへみよ袖につゝまれぬ雲あらはる
藤原為道朝臣（後撰）
深き水の中の雲に分かけて行く思ひの程もみえけり

津守国夏
よの中とは人にしられぬ思ひこそ（古）雲もわけよみさかれ
なりけれ
しらす　藤原信氏
しのふましかなるもあるかなそれにのこる上涌て思ひいろを
法性寺入道前関白家歌合に
基俊
まそぬらしせてしるみかけれまにはの思ひ（ろ）のをる
恋歌の中に　待賢門院堀河
（家）よしなきひきなき水のいたつらにたえぬいかにせんとはいはてもらさん
源清兼朝臣

ある人しらるかゝ
りしも葉ふきをりて
たへき世にしるを

しらなみのよせくる潮のいそ乃ゝ浦さむけ(?)まよくらこそいへ　万

弘安百首哥奉りしに

前僧正實伊

松山の花まことにけふを涼しくもやしらたえ（ん）　万
思ふ乃山を

亀山院御製

しらをやまかれの夜も涼しさん乃あさせくるい

為道朝臣

ましら滝山をふるきのわりとく誰よいにせの山の下枝

源兼氏朝臣

住吉乃うみのいさりせむるなや人めかくれておもひくらしね　古人丸

殷富門院大輔

人志れずぬるゝ袂よやくもや波よせかけし松の濱松

寶治百首歌奉る時寄木恋

常磐井入道前太政大臣

いかにせん○待木の梅も松ぬさて山の花は志ら人も知らず　古 兼藝

こゝろしらず

よみ人志らず

志らせたやまふとこそいはれる井の上を花桜色に出て　詞花

名を聞く月乃比萩の下葉にみえて人のあとに

つらつらしもく

清少納言

恋をみまちえいつまで待さ夜中も志らさいかくれ志のひそらら

逢

寄恋をよませ給うける
かはるへきたえて後て夜もふけさへ人めをさへつゝむ清
今上御製

宰相典侍
しられしな草葉の露よわかれよりはなれて袖そしをるゝ
百首哥奉りし時
太政大臣
時まひぬをの志るしなき思ひの人めなきわか袖の志る露
前中納言為相
えそしられぬ水の下にみかくれてかよふ心のほとやすくさを
寄池恋を
法皇御製

池水乃底の玉もにみかくれてもる心をとられならはん
たいしらす
前大納言為家
うちはらふわしの志るしのみこかりかれて人を恋ぬ日はなし
と上御製
はるさらぬ人の心とうちまかせいかそて月日もつもりぬる
正三位為實
かくとたにいはその杜乃木枝よそにもちらん言の葉もうし
神無月乃比紅葉に付て女のもとへつかはし
ける
法印圓慶
思ふ事いはその杜の木枝もの色思ひつゝ色にみえきさくとそしれ

續古今恋三ときくおなしく人の住吉まうてしいはその杜の紅葉をよみしかりはへりしみてよみて侍りける　馬内侍
思ふとも秋にあらすものつのくにのいはその杜に紅葉ちるらん
これある本ニいはその杜ハ住吉のあたりなるへし

ガラス使用

名所絵と云ことを　前中納言為方
しはしみんひとつまくらしきいへ人よいはその松乃しめ縄

百首哥奉し時　津守國冬

万四
うまさけをみわのはふりかいはふ杉
てふれしつみか
君にあひかたき

杉のかけみわのはふりかかさもさしかけてまもらし袖の時雨

弘安百首哥奉ける時
入道二品親王性助

万八
神並乃いはせの杜の
ほとゝきすならしの
岡にいつかきなかん

神なひのいはせの杜乃いはすとも袖の時雨としる人そなき

題しらす　新陽明門院兵衛佐
しのふるはいはせの杜乃露そめてしられん秋とこせまし

寄若葉恋と云ことをよめる
高階宗成朝臣
清う山宮さ若はまてさそもえてしのくさしのひこ　きらい

百首歌奉し時　前関白太政大臣

古
我恋はみ山かくれの
草なれやしけさまさ
れとしる人のなき

我恋ハ深山かくれの埋木のくちそはてぬも人にしられて

恋哥の中に　前内大臣　源

新古　新勅
みちのくのいはてしのふ
はえそしらぬか
きつくしてよつ
ほのいしふみ

人しれぬ袖の涙やみちのくのいはてしのふ乃山のした露

よみ人しらす
ひとりよかそひまあらて打払や人にしられぬ涙の上　葉

寶治百首歌奉ける時寄湊恋
後深草院少将内侍

ガラス使用

思ひつゝいはねはしらし心のうちは袖のみそしるなりけり

題しらす　　中臣祐臣

しられしな袖のみなとによる浪のうへはさわく心すくなる

前僧正公朝

わかそてもしかくむかしは此袖に人めつゝまぬ涙なりけり

源兼氏朝臣

人めのみしのふの浦にをく網のうちさへ絶て恋ふるかな

藤原為親朝臣

いかにせん袖にあまれるなみた河とめぬ淀にしつむひとかな

兵部卿親王家にて寄河恋といふことをよめる

平時範

人しれぬ心にあまるなみた河袖より外のしからみそなき

弘長三年九月盡日内裏にて三首歌講せられける時おなし心を

権中納言公雄

世をうしとおもひそつゝもわかせきなき涙の川は袖にせくとも

題しらす

藤原頼泰朝臣

まよはるゝ涙の河はやくもうきなからはくみなかさぬ

百首歌奉りし時　　少将内侍

いかにしてうき名をそゝんなかれ河その埋木のあらはれぬまに

ガラス使用

後拾
うつほるく我身のなく
ハ清まなからへ
にたえ煙ちれ

惜人名恋といふ心を
式部卿久明親王
漏らくハ人のためうき名取川うしやなきさにしつむことをも
袖しらす
平政村朝臣
しらうにはるひく煙も有物をとふらふさもしらぬつらさかな
（塩やくよりもふかくはくらへなきあへき）
寶治百首歌奉りし時寄烟恋
祝部成茂
たくひなき思ひと空にあらはさハふしの煙ハさらもなし
建長三年九月十三夜十首歌合に同心を
前大納言為家

煙もえとつけり
えし人のあとやらん
後の煙のあるや

なかめさん後の世まてのふしのねに煙と身をもたえはてんとも
恋歌中に
高階宗成朝臣
恋しなハ煙も人のいさたに煙となりて人のうき雲
平維貞
思ひをも我身のちの煙もたちやそふらんと
藤原基明
我のみそかくてたえ恋の煙にみをのミ
藤原經清朝臣
つきもせぬ我思ひしのもえくらへてしらさりけれ
藤原為定朝臣

萬葉集云 [illegible]
[illegible]
[illegible]
古今 すまの蜑の塩やき衣 [illegible]
[illegible] 女御
しほやく煙 [illegible] 袖のぬれ 家
けり
又 [illegible]
[illegible]
[illegible]
衣 [illegible] 袖のぬれけれ
おなし 女御
しほやく煙 [illegible]
[illegible]
[illegible]

下もえの思ひ乃煙まつ井ゝらなきやのそらに立なん
お大網に為海によま世ゝし去月社そかりよ

行清法師妹

志られすなくもしら火の夕煙あはれそとも思ひと
うらうら海に猿はおきやとゆすえ猿なりけれ
（古すまの蜑の塩やき衣をさをあらみまとほにあれや君かきまさぬ）

女御徽子女王

しほやく煙まよひて海士衣うきめをつむ袖やかわきなん
（まやみのよるん 家）

名所百首哥奉りける時

僧正行意

立海ら霞の浦は夕けふりそれとまよふ志ほ人をなき

古今 [illegible]
[illegible]
[illegible]
判詞 [illegible]
[illegible]
[illegible]
新勅撰ニ清輔
[illegible]
[illegible]
[illegible]

かりしらす

輔頼

（家）人めをも今ハつゝまし春霞野にも出るも名のなけれハなし

西園寺入道前太政大臣

志らすなや人ハ志るらん秋（よ）の夜の長きをあきけるとやあかしつ

天徳四年内裏哥合に

中務

（家集不載）鳥羽田の秋の夕暮たまさかに我ひとりとも人にこそ世や

よみ人しらす

志のふとて心よりうつりに(は)しもれ葉をそいかにかくさん

今出川院近衛

あはやくうこかしそ秋出つれはいろも霞のまとは隔けり

後二条院位におはしましける時人々によませられし
百首哥の中に名をしらぬ恋を
と
贈従三位為子
かくぬよに忘られぬやと思ふこそ命にあはさらうしさきなけれ

題しらす　能誉法師
思ふらん程には語る人もかな我世にこそ思ひしられき

法印圓浄
おもはせくのつらき浪せめて歌をやいつそてと拙やみぬる

左京大夫實任
いそちふ心のうちにらすしさも忘せくは慰さまん

よみ人しらす
伊勢
露とふ涙ならなん我袖の涙乃玉は人やみる

百首歌奉し時　従三位宣子
わすれしといひしかはせくあひとも袖にしもる我涙哉

嘉元二年内裏歌合に来言恋
前関白太政大臣
いつくさそしも忘によ世にかゝるは恋をとこ人のよ付に

右近中将　平政長
古友則
古
うきをもわすれぬ人は名そ門ら嶺よせての煙哉

正三位爲實

行ぬまも誰かは志らんこゝろにはかくれぬ沼や谷乃澤水

弘安百首哥奉りける時

入道前太政大臣

さかこえて高間の山の峯の雲ふられぬとつゝきなん
かるらん

寶治百首哥奉りける時寄雲恋

花山院内大臣

恋ひてもうき名は空に立雲のかゝるつらさは晴や果
なん

題しらす

藤原親継女

うき身にかゝるひね浦の夕煙なきさえにけりを知よし

弘安百首哥奉りける時

後西園寺 新拾

○入道太政大臣

新拾恋一 まも

不審

恋そてはみねの杣人朝夕に引そわつらひやむ時なし

と

前関白家 （押小路二条）

恋乃哥中に

思ふへき物も人の心ろそはなれ月乃うきなみなり
けり

百首哥奉りし時

従三位實子

誰をかはうらみんそれもまつ我涙のかゝるつらさ
名へ

題しらす

藤原雅朝臣

古

せきとめゝ心のうちの涙つせやそては淵の河となる覧

談天門院

14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

[illegible]残存

もろこしもせくらひさす洞川ちら神[illegible]

百首歌奉りし時　入道前太政大臣

[illegible]色瀬の[illegible]ハ[illegible]神まつ[illegible]

題しらす　今上御製

[illegible]ひろすまなくきみさハふせて[illegible]

三条入道内大臣

ゆくすゑ名もたのむ海士のかるみるめハよる神の浦

百首歌奉りし時　入道前太政大臣

[illegible]のいろ[illegible]しきえうらみ[illegible]

題しらす　法印頼舜

[illegible]ハ河岩[illegible]とゝま浪の行[illegible]ながれても神[illegible]

権律師園世

[illegible]ことちのひし神をしそ山めさと[illegible]のそれ

源兼氏朝臣

[illegible]めくし神つ瀬も[illegible]みゝそハ

藤原清澄

さゝ波や[illegible]の浪の[illegible]月すみぬらん

権大納言公春

[illegible]ふとんやなかんせきりそて[illegible]

前山[illegible]のしはしみゆ[illegible]

山階入道左大臣

さはうてもみのはよそくま山ふかき人めはめかるへきうす

隔後朝恋　　　　従三位為理

うきてこしそれ神もうけぬ人あれをいのりし夢のいつれとら級

家哥合に恋　　　冨家入道前関白太政大臣

なに恋のしのひもあへぬ玉のをよあらはれぬへきはかなさ

れもうちるあー

續千載和歌集巻第十二

戀哥二

題不知　　　　柿本人麿

（万一作者未詳）（六 全□）おく山の木葉かくれに（て 万下□）ゆく水の音きゝしより常に忘れす（らえす）

よみ人しらす

なきれすは山乃をかの尾のへ風よりて心も見えてかれき

新拾遺恋一
又見未定本新撰
和歌集　読人不知
末のちるけみと又ゆう
月草のうつろふ
そめてしあると
ほしきれ衣もれ

兵部卿元良親王家哥合に　　源宗于朝臣

（家集不載）人しれす心ハかゝるみち（も 万代九）なきを袖とふまつの時雨なるらん

恋の哥中に　　源信明朝臣

家
いとは物ぬ袖にゆくゑもしらすとも川ちにのこる浪の宿かな

崇徳院御製

秋てふあけの梶乃ゆりるかつまは袖のうへまてきえん
七夕にはかく衣乃ゆきをまみゆらん

藤原範永朝臣

わかるらん織女もあま川契ハ今宵そ袖ハぬれまさりける
人々に百首哥めしけるついてに

後鳥羽院御製

和田の原古きゝる浪の舟人もたよりの風ハわたらこれ たけ
をしへしらす

秋風ハ礒さほよりみはのまかふ夜の月もあかれ なーけ

弘長内裏百首哥奉りける時寄水恋

前大納言為氏

かけよまくおもひそみまし深かれとそあさき山の井乃水

不逢恋と

今上御製

なみた川みをつくしてもかひなくはなかれて末の逢瀬をもまたん

嘉元百首哥奉りし時忍恋を

入道前太政大臣

すてはてる身ハわかやく人として秋涙まもすくさみぬらし
ゑいしらす

藤原範行

心ひらく人にわかるゝは猶ますそけく心の色はさためす

邦省親王
松の葉はかはらぬ色はねくもらは秋はなかりけり

中務卿宗尊親王
時わかぬ松の緑葉なにかせんまさるらんつゝのまかひ紅葉

権少僧都澄守
えそしれぬ昔（万九）の跡の杉原ふくも霧とはさねまと

弘安百首歌奉りける時
二品法親王覚助
なくへるやらぬ時の空に深山にふる方に秋の朝霧は

題しらす
永福門院
いはまそての秋さそめぬらん風にも涼て立庭に池を思ひん

弘安百首歌奉りける時
入道前太政大臣
えこのれ空にみちしミ月のよを経てゆきさる秋の心

百首歌奉りし時
民部卿実教
まし山月のいりし空もかれやこれなかるゝほとゝきす夫
峯の葉中に思ひの事を

権中納言為藤
あかくは来るとて尖のこりれそ人をまちにはゝ

弘安百首哥めされけるついてに
亀山院御製
わかの浦の跡ハ絶すてもあらいそのかすにもあらぬ身をいかにせん

千五百番哥合に　宜秋門院丹後
時しあれはなき（業平）わかの浦ゆく跡も絶ぬよをたのむかな
かりしらす

大納言経信
いかにせんかゝる思ひの淵やそれかし浦きつる渚のうき世を

東宮傅師信
わかのうら浦の跡乃末ハたえしと思ふへきかひもあらしな

後京極摂政よませ侍りける八幡宮六首哥に

述
権大僧都公順
いつまてかわかの浦わにたちさらん神の恵を浦の跡にと

恋哥中に　皇太后宮宗兼
いせの海乃わかれかね(?)の実のこのなれハさくめる浦つ

為道朝臣女
立さらてすめん跡の末なれしわかその浦わかな

藤原因季宗
いかにせんわかその浦よわたのしらぬ人をたのむ哉

平通時
和歌の浦にみちのうつ跡つゝけし拙きとや

藤原資明
我袖はうしろの波ハくたれもせてみなとの浜の名にたゝき
嘉元百首哥奉りし時　正三位知家
松島やをしまの海士にあらねまてハ袖の色やかハりけに
見しらす　前参議忠定
象潟やそこしれあまの捨衣思ひまつまてぬるゝ袖かな
弘安百首哥奉りける時　大蔵卿隆博
忘すよみるめの浦による波をもかくも袖よりもまさん袖
ハ

恋哥の中に　前参議雅有
あま衣わきてそふ袖のうらみてもみるめなきさにぬれつゝ
ぬれしられ　為道朝臣
しらさりやこゝろあかしそ朝夕に波こそ袖のうらゝすま
藤原師光
よそにたにみぬめの浦のあま人やたかはうらに袖ぬらすらん
法印公恵
うらみのそらもきえてあまたは流に袖ぬらすみのうらめ計に
藤原成久
我恋ハしかはの浦にあまならはやとるめハなくて袖のぬるらん

百首哥奉りし時　関白内大臣

河のおとやらぬ袖の上まさる海のうきみるめなき袖ぬらす人まて
思しらす

従三位親子

持ちえて袖のうらみはみかけても又人をこそめくれ物なれ

二品法親王覚助

（新後拾遺ニ一首也）
ゆくさきはなかれもやらぬ都川のかれぬへきや我身そ

永福門院小兵衛督

他出ふみのうちは我しのうき雲に跡きえはてゝかくれ

尊観法師

誰ゆゑにやわれまよへるのちの世をなほさりともとおもふみかな

弘安百首哥奉りける時

権中納言公雄

難波江やおなし芦屋のうきふしをいつまてぬれてや猶さゝらん

百首哥めされし次に

法皇御製

葛城のまちくれ待まてはほとゝきすこゑ世あひかたき我身なりけり

二品法親王覚助

そのつくからくれなゐの紅葉に露の命をかけてしも

太政大臣

今更そ誰ゆゑ捨はてゝいけるを人のおもふ頃

恋哥の中に　平宣時朝臣

わすれすをおもひさりともしらすして命もしらぬものこそあれ

民部卿實教

おもひその後もつれなからはゝて世にふるかなしさやふるまし

権中納言實方（不審）

なからふる命はことにそつれなきをまつにしらてやたのまん

百首歌奉りし時　昭訓門院春日

ありし世にかはる人にはそれ（お）そのつらき人のうきみをたのまめ

宝治百首歌奉りける時

従三位為継

哀とも恋しき命をかへてらしまちくらしてそたのみつらし

たりけり　祝部忠長

めくりあふ心にまてそ月日ふく秋のよに恋の色はしらぬ

源俊定朝臣

さのみやは人のつらさに年月をたえてまつへき命のうきふかさまし

文永二年九月十三夜亀山殿五首歌合に　（あき）
河月　野鹿　山紅葉　不逢恋　続恋　為家判

不逢恋

卅四番左勝

普光園入道前関白左大臣

さりともとおもふかたりのなくさめにいきてそ都の月日をも経れ

卅二番右勝

前大納言為氏

恋にある身のなくさめの命こそ待もしらぬ間に世をうらみ

平宗宣朝臣すゝめ侍し住吉社卅六首歌
よみ侍りし中を
法印定為
後の人に命をあのうらみそてわくら（拾）幾（世）秋の末もしらす
法印長舜
忘ねなりし中にとひて年をへぬとまたはるかなる（ききくイ）
いつまて波をかけてさ秋衣かさねぬ袖そつゆけき
春宮新宰相
藤原為躬
こし月の積るも何か惜まれん人の心のうつりかはるを
贈従三位為子
つれもなき人の心はうき物をいかにしてこそこひそめけん
前権僧正雲雅
忘られぬうきよ忘るゝ物ならはつれなき人をなにうらみまし
大中臣為実
おもふとものみそのみの身にあまるみもあはて露そらなる
藤原秀長
思ひしらぬ心もなくてつれなさはうきや人のなさけなるらん
権少僧都浄道
後の人に命たのまぬ身をしらはなをしたふのちの世やらん
法眼寛兼

ガラス使用

後の世と契りし人もなきものを（お）しなぬ命を何惜しむらむ 不審

中務卿宗尊親王家歌合に

良洪法師

あはれとも見えてめくるは身の果を後の世まても人を恋ひらん

恋の歌の中に

法眼兼誉

逢まてと思ふ命のいつまてか恋死ぬる身そ猶惜しけれ

津守寛年

恋しなぬ命はさてもいかゝせん後の人のあはれなきまへ

藤原為澄朝臣

千載恋一已出権大納言実国

あつまれはいつまれ方とまた思ひ出しき（いてよ千）さしそつれなき（はつきさ千）人をたのむには

後光明峯寺摂政家五首歌合に久恋

源親長朝臣

つれなさはかはらさりけん（古）あはぬ命とふりてこそ恋の数はまし

恋歌の中に

権大納言実衡

命こそつれなかりけれあはぬをはなけかてあるへきものやはとし

春日社に奉りて侍りし卅首歌に

前大納言為世

命をは猶惜しむもつれなさのはてをは見はやとそ思ふ

嘉元百首歌奉りし時 不逢恋

いかゝせん猶つれなくて逢まても命ならはた人の心をまたん

百首奉りし時　六条内大臣
いつまても身のためをしき命をはいはぬよそへんとやは思ふらん

題しらす　後二条院御製
思しるも命はさらにあなかちにをしむとはけふなきはなきとさうくや

従二位家隆
とのへしるされき世にもありなから思ふ人の数なかりけり

弘長百首奉りける時不逢恋　衣笠内大臣
いそくへき忍ひしかたらてかひもなく人つれなさをたれにとはまし

恋哥中に　春宮大夫公賢
忍ひわひぬることはさらてたにいはぬ思ひを人にしられん

平宣時朝臣
後の世はしるへといそく心しもそもやすき人の思ふに

百首歌奉りし時　藤原為定朝臣
世をうけて思ひいつまてしのふにもいかにうきよのつらさしるらん

題しらす　中宮
伸ふへき後のうき身と思ふまてつらき契は此世のみかは

嘉元百首奉りし時不逢恋　贈従三位為子
何故かつらき世まてにめくりきて後のうき身をつけそめけん

百首奉りし時　津守国冬

とへかしな人はそれともかくしひとすしるしや思ひあまるまてとも

権中納言為藤

ねられねはかもとそれはかそゆめてもさめけりそのうきにつけても

寄夢恋といふことを

前大納言為氏

枕にも袖のゆめにてをくらふつゝまさるなみたは
わすれし
袖しらす

永福門院周防

まそてまのとみえし袖枕いかなれはわするゝなきさ世
ゆかるらん

二品法親王家五十首哥に

前大納言為世

源氏
うきもしにたえまへのあさこゝろ
みるめしるへはとらすやへやは

和泉式部集
神かけて思ひあるまし
いのるへき人はいかにいのるまに
きゝもしひける

住吉歌合に信輔
月影はゆくてに見えぬ神垣や
まへの水みなはたらしかるを

後撰
神かけてたのまぬ人を
恨つゝそのちかひけり
ゆめかみのしるしそ

つれなさを人をとは思ひてわかゝとあか涙そまつや袖をぬらさん

初逢恋といふことを

皇后宮

袖かきやまる人のわかこゝろのをてわか涙そよ袖に流れぬる

祈経年恋といふ事をよみ侍ける

法皇御製

みたらし川うきさししつみのこれをわからぬ袖と神のしるしを

恋乃哥の中に

正三位為実

あれそのかけは数たるきみたらし川のかけにあらはれつゝ

中臣祐世

猶すみておさまる河水の末もわか世の流れ[illegible]
平時見
[illegible]文殿はかはらとなりて[illegible]中川の[illegible]
津守国助女
古 万十二
駒とゝめしひのくま河に[illegible]人のかけそとゝめ
寶治百首哥奉りし時[illegible]
前大納言為氏
[illegible]かよひなれたる駒も[illegible]
承覚法親王
[illegible]
曾禰好忠
家
[illegible]あくかれて我も[illegible]思へ
中務卿宗尊親王
[illegible]なからのはしの[illegible]
元良親王
[illegible]
弘安百首哥奉りける時
入道前太政大臣
[illegible]
建保六年四月庚申に久恋といふことを
[illegible]
後久我前太政大臣

ゆくてにもなをやつるゝ山あらしにかり衣かへらまてねぬよは

悪乃心をよませ給ひける
亀山院御製
海山のそこもふかき悪とおもふ身はおそれ心にしつむかなしさ

盛明親王
おほかたはわかれといひしとこの山ひとこそしらねみはなれゆかれ

源兼康朝臣
ねさめやかよふ心ハ世にほそくゆかしき中ハ人めなりけり

前大僧正道玄
万十一
いそ乃かミふるの高橋たえそあふうきをわすれて恋わたるらん

院御製
うき中ハわかれの契とたえぬへきなからの橋ハうらやましや我

家に五十首哥よませ給ひし時不逢恋
二品法親王覚助
いかにせんうきをみのなみた河わか世をこえて流れこそすれ
そこしらす

永福門院少将
はかなくもおもひの川のせをこえてあさきおもひにいそきそめけむ
業平

中臣祐春
猶ふかくすみよしの江乃みをつくしふかきこゝろハ神そしるらん

津守国平

秋るみさりしや古吉野の河しまれいもせの山乃かけやうつると
大江広茂
いつれはかさなるらむみなせ河世々はつきすやすらん
平行氏
年をへる淵となりてもまたかはる流れぬ袖の涙なるらん
紀俊文
いつはそのぬるゝ袖にもやとる人さためなき世やうつるとのみこそ
中原師親
わすらるゝ夏は見えぬるうつゝにてそふる袖の涙なりけり
従二位經尹

おりはの夏のかつひとつゝ惜いるけく山乃端はみゆらん
前大納言為氏
わか事はおほしくてのゝまさてぬるゝ袖を払ふ夏にそ
すゝし
前参議雅有
きえぬ身はつゆもなきさ人を昔ものにあはれとふ
鴨祐治
浮くしそ根をたえてさそふ哉人もさく人そ暮にかんけれ
高階成忠
わひぬるの袖にみえし面影は小町暮とみてもわすれぬまし
中原時実

きみこひてねやねられぬにころ夢をとふてのあくさめて
うみ人しらす
をくろくも秋ちかゝる世によゝろ秋の葉に咲いらなと
秋たちての夏はゆかしてまつ風の風そよふてのこれ行ぬ
正暦四年五月帯刀陣歌合に詠
あすかゝれ夏つりまそ浦をとて袖はゆえさらし
おりしらす　是則
（家）
秋の夜と涌ゝるまれのゝはまた方は夏涌ゝる杉まさらなら
（後拾中已出　読人不知）（さて挂）（のこる氏）
寛治七年従二位親子の家歌合に
権大納言公実

秋風かは○浦ふくまてよゝはしつまとゆかひしらぬ人もなき（世よ）
秋恋を　院御製
な川のてにかきれしのうちとへて後しさらはかれ涌されぬ（古）（古列末）
嘉元百首歌奉りし時不逢恋
前大納言有房
打とけぬ契ながらつらき恋とのみおもふそ常はおもはれて（万）
百首歌奉りし時　法印定為
とはてさへならひにけりな下の帯むすひし人そ契すれと
恋の歌中に　権少僧都弁円
（続拾遺恋二已出）
逢まくのかたき人にかたらはゝいふさへたえてえやは思はん

ガラス使用

贈従三位為子

定なき命もいかにおしまれん理しらて歎く身ならは

法印房観

哀さらにたのめしほとの命そといけるかひもなくそなりなん

平宗宣朝臣

数ならぬ命をなにゝ世中に人の理りは悔とおもひしるらん

中務卿恒明親王家播磨

行末の理りもしりやなくて絶ぬへき我の命なるらむ

後二条院位におはしましける時人にかはりて

於前宮乃中に竹を植えといひけるよしを

贈従三位為子

亀おろへまれまろきらんもすゑなかきに数まれぬ竹也けり

前大納言師重

契しをおもひせしまれ年月につもる涙の色はそ見る

今上みこの宮と申し時五首歌合に

従三位為理

偽のなくはしらぬとたのまれむまれは数にもせめ

今上御製

さのつゝのみちをきりのまことをかみもつまその

かならすもしれ

続千載和歌集巻第十三

恋哥三

題しらす　　　　順徳院御製

未百首
いつはりのある世なりともいかゝせん頼てさらぬ夕暮の空

亀山院御製

ゆりもと頼めるゝ夕くれを頼みてまたにゝ人のかな

乾元二年廿首哥奉し時絶恋

前大納言為世

たのめけりなと人の志もちらいつはりをことにゆくときさらまん

恋の哥詠中に　　太政大臣

ゆくゑもやその道こそにましら須ん仏ちかひあり世ちかふねかひ

百首歌の中に　入道前太政大臣

人こそ流るゝ河よかはらさりけるまや末の世をおもひし
乾しらず　前大納言師重

頼れもまて頼りしこゝろひし人の末ゝ海とたのむなる
　権少僧都能信

数かゝそかきらもつゝさるわてしらずて仏とおもひさらん
　法印行源

仏ともおもひなるゝも心の紫にかりのハ露のいのちなりけり
　平貞時朝臣

頼しもさ浅都まれを待りとおもひ私しらすならひ
　平宣時朝臣

待よひに心やおもひと秋風乃ふかきまさりぬ夕くれもなし
古素性
　権律師円世

我よめ乃喜つ道とはたゞおもふや人ゆくしひの荻のうつ露
弘安百首歌たてまつりける時
　入道前太政大臣

色にこそいそくいそねかりそふまつと風の後にも　さけ
不審
　前大納言為世

よのめてくたり満ことゝち夕暮れまてまちにおもひ知らん
お
古

ガラス使用

前大納言為世よませ侍りし春日社卅首歌中
に　　　法印宗覚
さのみやは空（これ）の偽よしさそへん待くはまたぬ心ならねは　不審
たいしらす　　右大弁経長（[illegible]）
きりのめくもこぬ人を待夕くれは心をつくさて入あひの鐘
前大納言経長女
偽とおもひなそていかゝせん待れぬにたのまぬ夕くれの空
法眼源兼
我恋の煙とふとも志らせはやならぬ夕暮の空の浮雲
嘉元百首歌奉りし時　待恋

津守国冬
津それのつきせぬひとみそれまし海ぬて猶の秋の月かけ（世にも）
永仁二年八月十五夜十首歌講せられし時
月前懐旧といふ事を
為道朝臣
いにしへの月のなき人はそのかみも数へし秋を思ひ出そへ（いへ）
永仁元年八月十五夜亀山院に十首歌講ん
寄月時秋恋　　津守国助
偽の海ともあるらん夕まくれわれは秋の月のみえき
たいしらす
宰相典侍

しくをやたつの山の宵まつのほかに空の月みれは流れてと
　　大江政国女
とこんと契し秋も空になり今宵もさそや山の端の月
　　三善春衡朝臣
ぬれはてゝ涙かゝる我袖にやとるもつらくみゆる月かな
　　前中納言資名
こひれつゝ（けふ）川のすゑはのありやこよひ空の月に又移らん
　後二条院位におはしましける時人々によませられける
　百首の中に秋夜といふことを
　　贈従三位為子
そ（とお）のつらさみしよはあかつきの空あはれに秋やとはいそくらん
　　前太宰大弐俊兼
　恋の哥の中に
しつまらぬ空ねよりしてたくさあらし山の秋の嶺のもみちさそ
　　藤原兼經
はかなくと独なかめて空にもり（古）ゆきのほとをかしさにゐのきの月
　　平宣時朝臣
ぬるゝかる流れての秋かたにこゝろやこれを月なれるかな
　　前大僧正実超
あらされく宵のころの月影を空をよりそてなかむらん
　　前大僧正仁澄

月乃みそおなし梢にやとりける今秋も人をまちたのめして

後二条院御製

あはれさは秋にまかせて月をみてそれもうき侘よりやかる

伏見院御製

せめてなを偲ふとも思ひてやきえのちそうきよのつきは

今上御製

衣手にいく秋の露をかさねけん国へてもいつもぬれ月影

古

嘉元百首哥奉し時不逢恋

前大納言為世

かねてくもいつまてひとりまちわひん百敷の色のおとこらの

ともしき

一九一
なしつるゝ風のをときゝてに
あきの[illegible]

兼補家集より[illegible]
兼輔と家持[illegible]
但彼家集よ
[illegible]の歌もこの。
[illegible]
[illegible]
[illegible]

続後撰遠離に
権大納言時光
今も[illegible]

題しらす

修理権大夫隆康

衣うつは雑とかはるむしの音も夜つゝ秋風に秋は草なり

歎そをおもて人のとせうりもれをを

中納言家持

兼補集　兼補　兼

年をへて待とたのめしは中々に契の夏のみくさ

読人しらす

右近大将道綱母

遊録日記不載

ふしせゝやつらねをまちぬるはいかゝせし不いかにならん

読人しらす

中宮

たのめつゝ待秋山ときつれとおもてやあれ[illegible]

百首哥よみ侍りける時　入道前太政大臣
こよひそつくし晴るゝ雨ぬまにもさらにたれとはたゝすまん
稲田もり後のかりおのやま山にたつゐる衣の蔭はなる

たいしらす　紀淑氏朝臣
古 よはら○わけてかゝる道芝の露をかさぬる神のうへふ

宝治百首哥奉りける時寄雨恋　土御門院小宰相
思きやよるさゝをさら袖にたれまかせ雨をそへんとは

後二條院御製
恋の涙そてに濡せ侍りける
限ある逢は今そかさねし世をこめて濡にし袖のなかの中き

昭訓門院権大納言
かなふへき契りともなく頼むそよそれにも人を恋ひわたるかな

藤原泰宗
あらましは打とけられぬ新枕そ世の夢にもくるしかりけり

たいしらす　藤原基世
忘るれは猶そ一夜の新枕夢のうちなる契りなりける

無逢恋といふ事をよみ侍りける　為房朝臣
とまくら人ねかし人をいつまてかうらみむ涙まつ波

嘉元百首哥奉りける時忘恋（逢イ）

入道前太政大臣

契りしも頼まれぬ身の思ひ出に逢見し秋の月にもわすれ（せす）

寄逢恋　前大納言為世

つれなさに捨てし命も惜しまれてあふ夜のうちにきえんものから

弘長二年亀山殿十首哥に稀（不）逢恋

光俊朝臣

はかなくもみしこそ夢よさめぬ夢のかへは現よりなくくみやなけん

恋哥中に　大江貞重

いかにせんうつゝは夢と頼まれて逢ふとても猶うたかはれんは

法印長舜

かりそめのと夜をちぎれ夢ならで又ころもその涙もるかれ

前大僧正實超

今はよもさしむらん名残も惜からし心かはるゝ夢ならはこそ

権大納言為藤

思ひつゝぬる時のまにあふ夢の心のこれ夜よりなからなか

源光忠朝臣

あけくれに見るときりのつゝまれ別るまでの名残なりけれ（これよハまさるらイ）

右京大夫實任

と夜をなにと忘るゝ身の程とも頼みいつか頼らん

ガラス使用

三善康衡朝臣

なくさむるその程ともならやと思はれぬ人に別するかな

光俊朝臣

まねくとも留らはこそと秋深く出にし我をみてさゝふ

題をさくりて詩歌を合られ侍し時別意を

源具行朝臣

あるの旅のうれいしせめてなきしやめくとはまさぬ別なるらん

たいしらす

従三位親子

けふまてもむすひきつるを袖をまく定秋の露しく

民部卿實教

別路とハ旅のならつ
てハよもあらしされ

さもしらて別をいとふくるゝ人の心は明ぬよるのしらるらん

前大納言家雅

うき人の心よりそく別路をしれける鳥の音をそなく

法印公恵

限りと明ぬまてあるいつけとも惜とも今さ別なる旅は

二品法親王家五十首哥に別恋

前僧正道性

あひみてもなくさひの別らは猶こりたるれ身をなけきとそ

百首哥奉し時

少将内侍

明ぬまもしたふる人に別路をなきて鳥の音にかはるらん

別恋を　　　　　　主上御製

人はなほけらしへめくるさへ情もとらさるまゝらん別かな

遊義門院

行末のかゝる契りやさてかはる別の今すくりれ

前中納言有忠

あやにくにふかく成ゆく人の色をふて情もそみせやつる別を

静恵法師

忘るゝも人はうらみぬ契乃我のうつゝさあ何さ覚

祝部成久

忘れすてゝ猶はうちとけ忘ゝまりし元をうきられ心別らり

藤原秀長

はしやさへそむけし人えんとおもふくるゝ別なら世を

藤原泰祐

後とたのむをたのむをは別路の今乃つらさいかすくさみるまし

読人しらす

別路の程をいはゝ契りともつきぬへきめく覚我ららめ

三善貞康

明ぬとも帰るならねやすらひまし夜の中に別なきを

藤原宗秀

くれまてゝ後を思ひもなくさめし玉ゆらさの方の明たる月

藤原宗行
月にも面影をのみとゝめおく人の袖の別をしたふなみたは
弘安百首哥奉りける時
大蔵卿隆博
別路のうきにたへてもいさや世に又有明の月やみさらん
題しらず
前大納言通顕
うき物と又いふまてはこれからに二たひみるや有明の月
廣義門院
有明の月さへくもりやいつまてと別るゝすゑにこひしかるらん
法皇御製
きぬ〳〵の袖のなみたをわすれても面影にのこる有明の月
題をさくりて詩哥を合られ侍し時別恋の
心をよませ給ける
月の夢よりはやさめにしと別るゝ袖の有明の月
暁恋といふ事を
今上御製
うらみてもおしまれやそ別路の涙にくもるありあけの月
嘉元百首哥奉りける時暁別恋
前関白太政大臣
おきて別る涙にくもる月なれは袖にやと（のイ）りし影はみえけり

ガラス使用

百首歌よみ侍りし時　前関白右大臣（押紙）
しのゝめの露はまもやゝしられゆくあふ夜の名残ぬれこそ

正安四年六月五首歌合に思別恋といふこと
をよませ給ける　後二条院御製
関守はあるかさつらうらも猶よ我かよひちを思ひ別るよ

百首歌奉りし時　内大臣
なきあとそ花も雲かゝるうらめしき物思ひをよそにあらなむ

恵頌中に　前大僧正教定
たちわかれ袖よりけつるなみたの別のきぬくゝめの露

寶治百首歌めしけるついでに野の原露
後嵯峨院御製
こゝ乃森ある野の原の露けさはわきてわかるゝ袖そぬれける

女の許よりかへりてつかはしける
左近大将朝光
あさましきこゝろにしはさてもなくさみきなとりけさしも秋の露　久紀

百首歌奉りし時　入道前太政大臣
後朝もたえすも心をいまよりこり深き別をのなごりの露
そなたを見れは
賀茂久世
とけてぬる花田の帯の一すちにかよひしふかき物はつらさや
女のもとにゆかりてあしたにつかはしける

ガラス使用

参議定頼

おき別る枝乃花の戸に今朝さへやそて露けかるらん

題し　　よみ人しらす

うつゝやまたあかなりし夢をむすひもはてぬわかれ鳥の声

後朝の心を　　遊義門院

鳥の音におき別つる衣〻の涙りそへかねと朝の床かな

永福門院

別ても猶いかに深き夜の残を残さゝりし床にゆかれ

百首歌奉りし時　　二品法親王覚助

とくはさてそを（お）のかきぬ〳〵立別鳥はゐをまちしのゝめの比

拾遺恋四　実方
時のまもつゝまくしるも
ちるものとふるもかくれし
すむらん

朝恋を　　大納言隆博

忘れなやなれぬる衣の名残をも朝の枕に残る袖のかは
人は相見し後りつるかし

参議補親

とりとめぬ名残もすさめつ別れにはいつくあくさへ首なかりけん

たいしらす　　素性法師

後撰四已出　新古恋下
素性集　新古集
いつかはと立帰りけむあら波のよりかに袖のひる時そなき
（のま）
（もなれし　後　新古集）
（素性集曰）

家に百首歌よみ侍る時恋を

光明峯寺入道前摂政左大臣

消かへりのわすれ侘衣を（お）のかれゝをあれてもかゝる袖の涙かな

ガラス使用

後拾
おほかたはますたの池の
ねぬなはゝくるしく
のとことそなりにける
六帖
恋しのみますたの池の
ねぬなはのくるしくそ物の
みたれともなる

恋哥の中に　　前大納言俊光女
いかにせんうき中河乃浅きせに猶契りのさてもと絶なハ

名所百首哥奉りし時
皇太后宮大夫俊成女
こひのミますた乃池のうきぬなハ絶ぬ契りそ苦しかりける

ものいひける人ありときゝてもとへつかはし
ける
和泉式部
天河逢瀬はよそにありなから雲井のよそにきくそかなしき

縁恋の心を
源兼氏朝臣
ちしや又さそと絶せハその河せの難世よたくへてそなかめ

弘安七年九月九日三首歌講せられける時
寄菊恋といふ事を
後近衛関白前右大臣
うつろはん人の心もしら菊のうつろふ色とおもひそむらん

前大納言為世
たのましなうつろひぬへき白菊ハ霜にかはる秋の契りならハ

題しらす
津守国道
我よのこうつりもはつき菊ハうつりても花ハいろいろたのまん

法印長舜
わすらるゝころ秋のつれなさハ人の心の花ハさその雨

ガラス使用

権中納言公雄

古 花の門にかつみくも旅数れはておきける流の清きこころハ

弘安百首哥たてまつりける時

前参議能清

あつま人ハ我やまとなるかた人乃ちきりをえんやハ数まん

人の鏡のうらに書付ける

藤原宗秀

面影をとゝめもおかまし鏡えし人にこそ語うつれは

題しらす　　藤原利行

世の中ハわするゝもあるも侍りともの心乃まさるはかな

藤原宗泰

かれまく契りしをみちある縄あらぬ心の神はうけくらん

業平朝臣伊勢へ下りける時斎宮なる

女房の許にて　　読人不知

伊 千はやふる神のいかきも越ぬへし大宮人のみまくほしさに

返し　　業平朝臣

口 恋しくハきても見よかしちはやふる神のいさむる道ならなくに

月夜にて里にまかりて女のもとへつかはしける

中納言兼輔

家 浮きて行く水も舟もしらねハ今宵の月夜河もさらなりけり

西行
月みはと契て出し
ふるさとの人もやこよひ袖
ぬらすらん

慈鎮
長月もいく有明に
なりぬらん浅茅の月
のいとゝさひゆく

旅懐といふ事を詠ませ給うける
土御門院御製
別くもゆくも明とあかんちきりて出し旅ねの月

百首歌奉し時　　左大臣
月みしもとへき都を思ひわぬをなくさめかねに涙そふらん

正和二年九月盡日十首歌めされ侍りしに
帝待恋　　今上御製
今更に思ひあるもまのまよ〇いまはゐも見し夕暮の空

恋の心を詠ませ給うける
後鳥羽院御製

和泉式部
秋ふくはいつはつらくも
とりわきぬかなしもの
そ袖のこえるぬらさぬも

あれと思鴫のはねかきかすまれ君（お）わすれぬ時つる袖をみよや

百首歌奉りけるに　　皇太后宮大夫俊成
難波めのわしてしのやのしのふ一よのかりもしらやする
二秋渡る恋ともしめら　　中納言雅春

時のまにわすれぬ小夜さへいつはりそわれをまつてふ文はあらぬ（万土）
そいしらす　　藤原行朝

まちくの別をしらぬ月の夜の戸をまちわひし袖ぬらさん
法印園勇

涙もよみを涙のもれさそこゝ思ひ夜いたす袖の月影

丹波忠守朝臣

忘られし袖に涙は猶やそこぬ我まつよひの月の影に

道義法師

面影も涙にこそはうかひけれ月を人のつらさ忘れて

藤原基有

何よりか袖にやどれる秋の月人は涙の外にみるらん

百首哥奉りし時

権中納言為藤

面影のうつりし頃の涙にも猶みえしにもおもひ今日の涙に

まくらこそ其夜の涙をしらすとも人てらし月

なかりけり

忘れわひそ涙とされしかならすも袖のうきさそ

寶治元年十首歌合に遇不逢恋

前大納言為氏

わかれしよおもふてかひもなきに涙さやみすらんと

たのみしを

前大納言為世

あけくれもなくの涙よひるまなき袖の露の雨けり

懐恋を

藤原泰任

別くるとれやましらん恋の人のこゝろをみてなけかな

嘉元百首哥奉りし時会不逢恋

従三位為信

ガラス使用

人心いつはるかにかはらんとはゆきあかす夜半の空哉

権中納言公雄

人をまつ人はかへりてしま秋の暮は有明をまちわひしとへは

前摂政左大臣

ほのかにしそのつまさきはまてなきぬかくはかなくめり抱て思へは

住吉社によみてまつりける百首哥の中に

前大納言忠良

みなましらそともかれぬるの木のまよりもれてそ秋の月影

長月乃有明のほとにや侍らん

和泉式部

後撰　源信明
恋しさはおなし心にあらすとも
こよひの月を君みさらめや

和泉式部日記

よそにてもおなし心に有明の月をみるやと誰にとはまし

千載戀上　圓位法師
まふまてのおもかけのみそとふえて
月をこふやとすつくも哉

続千載和歌集巻第十四

恋哥四

題不知　　坂上是則

秋山にまかふ霧の峯こゑくもれはもの思ひなき身になれる

物ゝおもふ人をのみゝ人わかしとやてつらんしる

九条左大臣

秋はての声さへかれし鹿の音もとはぬ人しも思やるらん

建仁元年五十首哥奉りし時　　前中納言定家

うたゝねにとはれぬ里の秋の世に我方うつる月の庭はあれ

まさき

万七
石上ふるのわさ田を
いてすとも縄たにはへよ
もりつゝをらん
縄乃字无本もあり
よ家持集にも
つるしほりやの
句あり

恋の歌の中に　　後深草院弁内侍

物思ふ涙をそへてをく露に我身の秋をしらす袖哉

前大納言為氏

さそはるゝ人もなし秋の風かりにもかくと誘ふらんかれ

千五百番哥合に　　二条院讃岐

猶のこしおもひのまゝに思ひつゝみて人あらは物思ひもし

今は逢事なくてはなけくとを

光明峯寺入道前摂政左大臣

たのめこしこの夜へ人は君枯て我方むなしき秋の夕暮

洞院摂政家百首歌によみ侍しを

皇太后宮大夫俊成女
枯ゝの野もつらし跡絶てあれ行宿のしけ草
家に五十首歌よみ侍し時絶恋
二品法親王道助
かはりしと野の浅茅生霜枯て日もひとの跡の結ほれけん
題しらす
前中納言定輔
色かはる人の心乃浅茅原いつより秋乃露をおくらん
九条左大臣女
尋くもこちらて秋の終をすし人ハなれにし庭のよもきふ
皇后宮内侍
なにすかよ見て乃人をや三輪の山あらし標の杉乃末ハい
嘉元百首哥奉し時忘恋
前大僧正道玄
きえねたゝしのふのみの心にも思ふもあまる乃袖の白露
たいしらす
権僧正慈信
ねやまてくをとそひとしられけ衣手をちらす夜の情なりとも
右大臣
よのつねの秋の時雨にハ我ひとつの袖そぬれける
源親教朝臣
つゆ草の花色衣袖のなみたさへうつりそめなん

左近中将公敏

うつりゆく人の心乃秋はてゝむしのねかれとの袖そかれ

正安三年九月盡日伏見殿に御筆にて

人々をさそひて五十首歌よませ給ける時

左大臣

身乃ほとにかゝる宵の袖のうへに露もくらすなりぬへし

題しらす　　読人しらす

露さくらのもし清まとてあかす枯野の中に尾花乃ちる草

中院侍従につかはしける

忘れしと思ひしものを袖のそてにまさる衣手ぬれつゝまされ

返し

中院侍従

かたみをもわりなくこそは唐衣うらむる人のなさけなりけれ

恋歌の中に

藤原雅郷朝臣

みるたひに我袖をぬらすらん忘れかたみの身にしあれは

右兵衛督教定

逢事も今はなきさの浦風によせくる波に袖をたにせよ

平時元

あふことは海士のかるもにあらねともの濡ぬ日はなし

前権僧正雲雅

人こゝろあきの浦のみなれつゝ袖さへうきをいかにせよとや

正三位経朝

あつまちをとほなるみのうら波によそにさそひゆくあまの釣舟

従三位寛子

いつはせんうき中河の水と濡さ世をしらぬなかれは

観意法師

なかれくる瀬し末のいつくれはなかしまからぬ中河の水

唯教法師

あひみても人の心のかはる世に又袖ぬらす中川の水

大江貞重

こゝろくはいかるそやまた飛鳥川淵せや人の心なるらん

前権僧正道顕

夜ことれけふし涙乃命せぬ思ひ出くも月にこほれて

平重時朝臣

おもひきわかぬ涙のうきねしてゆめまつとしもなき枕かな

参議雅経

涙さへ江のうきたに恋衣あめのはなのゝかぬ袖も絞るなるらん

平宗宣朝臣

忘れ草よし心うつる人こそ種となりも我身てみなくまらせらめん

業平

丹波経長朝臣

いつはりて思ひ後まんと飛ゆく人乃心は我身なるらん

續後拾遺 恋四
左歌 入道前太政大臣
夏まくやもゝくや
あのこすゑゝゝ 下句同

ガラス使用

嘉元百首歌奉りし時忍恋
前関白太政大臣
かくてこそねられさらくも忍ふらし忘れなはまた夢はしらす
源宗氏
わきかぬる身をかけうき袖に忍ふる心ぞつゐのあとなりけれ
百首歌奉りし時　参議雅孝
そのつらさみるやうとまれいつしさ別ぬるなかなり
恋歌の中に　前大納言通顕
悔しくそ語りそめてうきぬの袖とみるまて
よみ人しらす

思ひやる心はかりのかよひちはしくとの雲井まてなし
業
太宰権帥為経
せく袖の色こそかはれすみさへ見えけりまれなる人の涙よ
女二宮治部卿
我かくの忍ひ袖しほるまて人のしるとなるらん
津守国助
消えて又秋の色のかはるらんひさき袖にしそのゝ露
宝治百首歌奉りし時寄風恋
花山院内大臣
言の葉は便なくて忍ふをもとゝさふのに秋風そふく

ガラス使用

たいしらす　　　前参議実俊

つれなくも猶ながらへてかはらぬは思ひ絶ぬるつらき契を

権中納言実為

あひみても人の心乃外なれは恨もまつはれなくそのれ

久敷をとつれさりける人のもとにつかはしける

中納言定房

池水のいひ絶ぬとやおもふらんぬまさへ河のかかるらん

たいしらす　　　源邦長朝臣

山の井乃わき流るゝと見えていつけみかその契也けり

為道朝臣

何ゆへに袖ぬらすらん人こゝろあさ沢水乃あひ絶にて

安嘉門院甲斐

深からぬ人乃ちきりにいにしへの野中清水ハ結ひ絶ぬる

二品法親王家乃五十首歌よ寄恋

前大納言為世

つれなさて涙なかる物を水無瀬川ありて行とハ頼まし

古

卅首歌奉し時　　　権中納言為藤

河舟のみをさかのほるつなて縄えにしゝのひもあはれて

宝治百首奉りし時寄橋恋

冷泉太政大臣

続古今恋五　権中納言通俊
情なくはいかにせよとかおもひしもつらきをにも思ひける

いつまてか久めの岩橋中たえてかよはぬ人の跡をとふらん

恋歌中に　源兼氏朝臣

忘るらんつらさや後はまさらん久米路の橋のなかなか絶えは

式部卿久明親王

逢事はとたえし橋の後も又立かへり恋わたる哉

権大納言公冬敦

思ひをはさらに後のたのみそらにしよしと思はれん

禅心法師

まちよはも心あれはいるらん[illegible]

源義行

新古　長能
わくこその葉におく露清しとかりのしらやくへのしらん

見てかりやそとりそとおもはれは猶まつさはるひ物を

永仁二年亀山院に五十首哥めされける時　津守国助

命をはおしまぬ身にまかすれはあはれむ人はなけり

題しらす　前内大臣公

うらめしくそは世をうりを捨けるはおもはれてもあはれ哉

永福門院

おろかなる世をたのめてまたわかれしかなしさそ忘れぬ

権大納言兼季

なからん後をたのむにつけ世こそみつゝ思ひ捨るなりける

乾元内裏廿首歌に

前関白太政大臣

不審
絶えはとちらぬ末の命さへつらからましへあり（右近）
恋する乃中よ　平貞俊

世々をへん暁ともふとしいくとも人の別さへなん

平宣時朝臣

とりやしらにのこさく嫌もおもふ秋ましそ鳴くなれ

前内大臣公

ありはまほしの別するほどのをとひくさくも袖ぬれ道

宝治百首歌奉りける時寄暁恋

従二位行家

山高み石川の瀬をわかるらん人のなかをこそ
まし
だにしらず

二条院讃岐

今さらにいつくへと影にのこせを続けよ（伊勢）
とま

右近大将道綱母

（かまくらの日記）
打ちる薬のゝ積るさへ山にも歎くかずまにはなりけれ

平泰氏
思

とひこや鳴るよいく夕暮にまでゆきし袖

津守経国

今更よくいこさいひく難れ共総程にさくらの糸（衣通姫）

金葉恋上
白河院御時越中
待しおのふけゆくまゝに
なりきうんそひきすゝむ
ろしくゝみと
千載恋五
上西門院兵衛
はちんまそしたのみ
よて怨みかひなし
るかるもはつりを

菅原貞恵

とりもとて何かはく人と恨らん思ひさえてはとの契を

藤原宗行

夜門のまひさ乃糸はよくらふとられ中そと絶ぬる

為定朝臣

こねまてもひとつまあくさえてたのみし程の浦りかな

後二条院御製

まちなくそ一夜ばかりへてとまりならでと背うらみし

中宮

とのつれ思ふ何やと判つくされのもそはみいと

嘉元百首歌に寄衣恋

万秋門院

いかなれはあけそそめてこよひはかりにやとすくさん かゝ

題しらす

僧正覚圓

契りある月はこなたの面影をいかにも雲井立へそふらん

弘安百首歌奉りける時

前大納言為氏

頼めけの程を遠あかつきみそ待よに似る山のはの月

恋の歌中に

入道[illegible]将

待しまま夜の面影もさらにありさき山乃端の月

ガラス使用

順徳院御製

暮とふす浅茅か末の露のあかぬ別となりにけるかな
月も秋風に露もやとるらんうはの空なる袖の涙に

信實朝臣

いにしへを思ひねかみの月影を偲と涙に袖やくもらん

永仁二年八月十五夜十首歌講せられし時

月前旅宿といふことを

大蔵卿隆博

月をこそみしよはかけとあかしつれ旅ねの末はわすれもやせむ

為道朝臣

とのゐせしみやこの秋の面影を草にやとせる秋の夜の月

題しらす

新院兵衛督

あはれにも月をその夜になれてみし人そつけくも恋しき

太政大臣

あかなくの月のみつれけしきかな秋のゆふへのさかりなるらん

参議公明

忘れしな秋まちえてもめくりあふ月にむかしの影をとゝめて

前参議雅有

とのつくやはらさき人のこゝろあはせよ秋のよの月

法眼行濟

も路しもよみしを艶んの面けよ月を涙とおもさらひなる

義圓法師

うきれはことハさみの秋の月せめく涙よやすまらぬかな

嘉元百首歌奉りし時

前中納言經繼

人ハよも忘れもせし我身にハみしをかきりのあり明の月

題しらす

廣義門院

荻乃月しらみかゝれと別し人をおもかけまさる秋ゝし

基俊

わかれの月をもおもしろ君かかけをとふらめをかしかる

藤原為徳朝臣

限りとて別しわか暁の月とこそみしくもかく秋ならん

今出河院近衛

心いつる有明の月もかさねてもうらし中ハ秋そ秋

藤原泰宗

見しまゝにかはりし契月けふ更親なかりなりし

平兼時

忘れぬよ空くもれ入月の名残そ中に残る庵かな

從三位親子

うき人は秋ふるれ袖の上に月あれはれそいとゝやせん

弘長内裏百首歌奉りける時寄月恋
前大納言良教
恋しさはみしよなからの月にも猶さゝぬ袖は涙や絶さらん
憲子中将
古いつはりし末なき人の月のみや涙にそ流れてしのそらにゆくらん
津守国助
従二位行家
ひとりまつ涙にくもる月影をたれとかやうき人のみるらん
古うちはらふ袖のなみたも絶やらて古いつか定めし待夜の跡そ
弘安百首歌奉りける時
前大僧正隆弁
行末の秋乃こぬまてはてらすらみ秋の夜はみよ猶さす
をりしらす　平貞資
帰るさし恋に逢ふも絶にけり独ねの袖や人のつらさならん
中臣祐春
ゆくゆくも契りしことはわするともみし世をさへやなかにすてける
平行氏
逢事もつらき涙やかへらんさしもたのみし人に一
嘉元百首歌奉りし時逢不逢恋
前中納言為相
むかしたにもわれに捨られしかはれとともの恋をとへかしとき

恋哥の中に　　　　土御門院左衛

業平

みをもわすれてまとろみし夢ハおもひあやなくさゝら人の面かけ

　　　　　　　　　中宮

いつはれハ秋の夢とうつゝとも思ひあはせぬ露なるらん

百首哥奉し時　　　右近大臣

我のみそ思ひわひぬる窓に又さめぬ夢のむかし浪ハ

題しらす　　　　　前参議家親

今ハさて夢もそへぬるねさめたにしらぬわかれにおもひかねつゝ

弘安百首歌めされけるついてに

　　　　　　　　　亀山院御製

なれし世にみはてゝもひとりねさめて夢かよひける人の面影

恋哥とてよみ侍りける

夢にたに又あふこともやかたからん涙にまとろまれぬそせめて悲しき

　　　　　　　　　正三位為實

　　　　　　　　　祝部成良

そのつらさみしやその秋の面影もいつまての夢の跡なるらん

　　　　　　　　　源重之女

おもひねし夢とつゐにさめはてゝ人にかたるな後の限りを

平貞文家哥合に會後恋

　　　　　　　　　貫之

家集不載
わかれにし人を数ふるみくるしさよ人をおもひかへさるゝかな

題しらす　友則

家打之し　六
年ふりしおもひすれと石上ふりにし恋そ忘れさりける
（それと六　そまとふ　らける六）

業平朝臣

伊
年たにもとをとて四つハへにけるを幾たひ君をたのみきぬらん

宗于朝臣

拾遺雑上　懐旧乃つゝき男之集乃題にあり

拾遺巳出　男之　敢男之集　六帖男之
宗于集不載之今依之
年月ハ昔にあらすなりゆけと恋しきことハかはらさりけり
（ぬりつるれとも男之集六帖　やけと宗于集拾遺）

後深草院少将内侍

忘れぬハ昔のつらき年月ハいかなる中のへたてなるらん

藤原為明朝臣

たのみこし世のならひハ年月をへてそぬる袖乃つゆさも（けり）

遇不逢恋を　院御製

一夜たにへたてしほとを年月のつもりぬるかな

懐旧乃心をよませ給ける　亀山院御製

花月乃あかぬつもりの数かさねくもりかちなる袖のうら波

ガラス使用

續千載和歌集巻第十五

戀哥五

いひ初て久しくなりゆく人に

平兼盛

（家）ゆくのと見ゆる高き山のたかね風も雲に空なる縁

いかなりける時にかありけん女のもとよりいひつかは
しける

權中納言敦忠

（家）うき事も忘れけさ夜されは夜山のたえし水のあと（るなり）（もあとに）も遊す

題しらす

前中納言定家

分くさまさもいかは夜もいさみつゝ我身さき松の夜の風

信實朝臣

末乃露あさしの夕風に我身よそへて消ぬへき哉

物申しける女の又人に物申すと聞てつかはしける

女房

兵部卿元良親王

（後撰忠一已出　題不知　読人不知）
いたつらに山のとにそこまて涙ぬれにし袖なる（子　後撰）

光俊朝臣すゝめ侍りける百首哥に

前大納言為氏

忘しと契し中に末の松まつさたに波たちこえなん

弘安百首哥奉りける時

伊勢か
こひしやとはふの山の
一松ちるをきゝつゝも
いつもつらくなれ

忘らるゝみの山のつれなくもまたとはれん名こそ惜けれ

ガラス使用

嘉元百首歌奉りける時　會不逢恋

法印定為

こえなれし後はみしにそ立かへる憂世の山のあなたなる空

永仁二年八月十五夜十首歌講せられし時

月前恨恋といふことを　権中納言公雄

うへくもらぬ月もかこたれぬつらき人ゆゑ（之）くもる涙に

恋の歌の中に

平時敦

今はてゝつらさをみてはいふ人も袖をそぬられぬ月のかけかな

平貞時朝臣

つゝしはもうき人をまつよひくれしみし涙にくもる袖の月

歟

永仁六年九月十三夜式部卿親王家三首

詠寄月前恨恋　平師時

みるらくもみさらぬ袖をとはねとも恨よりかゝる袖の月影

たゝしらす　藤原宗朝

侘るゝて何と（カイ）うき世に恨らん我とひまなき雨の月

衣笠内大臣

いかにせんくもる涙のますかゝみうつるみしらて影やたえなん

外し

寶治百首歌奉りける時寄鏡恋

従二位成實

うしとのみ涙にくもりまさるらんひとりみる鏡乃影をもしらし

古

前もてきも恨とはいへと

し家さし成奉り

にさつるみなれは

一万十七
わしとゝめゆくゝ
火のおかしくつの
杉来ふりほゆるも

百首哥めされしついでに

法皇御製

うらみても猶ひしれな待き恋せいさりて更人の思こそあれ つ
恨来乃心とこままとせ侍うなる

院御製

名もつゝみもされぬ浦波のわさ夕舟よりかゝらり あり

土御門院御製

ぬれまさる袖よりわあ海士のもしほうらみよそのころめ かゝる

従二位家隆

とのつくえへし人の海士のもしほを思ひふる人よ悟まる

題しらず

平時元

いかにせんうらよながらの奥津なきそてかよふ人もしらね 恨と

権律師園世

恨侘てあふかくむ海士のぬれ衣恨とそめぬと人にかへさん

藤原重綱

忍ふる人を見えまてや涙乃かゝき恨よ身にこそ時

正三位為實

身をはさて思ひそ捨しう何を見むゆきの恨ひさまふ

寳治百首哥奉りし時寄虫恋

花山院内大臣

ガラス使用

頼みし我かためなりとうけ[illegible]思ひ[illegible]身なれよ

題しらす　　興風

（家）法まよひく身を宮柱と成めまつら[illegible]（世　為下）今は[illegible]（こと）

百首歌めされしついてに

法皇御製

ちる[illegible]神も宮柱のむすひよ世ゝに絶ぬのことをまもれ

[illegible]の宮の中よ

法印信成

うつゝには[illegible]後めくみその蔭ふかくてよ猶やうらみん

法眼行済

ゆくすゑも[illegible]流し[illegible]は浮田の杜乃しめ滝

源親教朝臣

枝さへ八千代は絶えて流くる原河よりそ[illegible]みゆるらん

前大納言通重

さゝれ絶ぬ根の宮[illegible]風よ[illegible]露は[illegible]

弘安（元年　新後拾）百首歌奉りける時

入道（後西園寺）前太政大臣

（新後拾遺異本出）身乃うきに思ひ絶せは深草原に根[illegible]風[illegible]

たいしらす

安嘉門院大貳

秋風よ[illegible]宮原露[illegible]人[illegible]

洞院摂政家百首歌に

ガラス使用

定家
水くきの岡の真葛
とかへしの下葉見えて
つゆ顕見えて
うらみ似るらん

前大納言為家
海士の住里の苫やの葛かれはてゝやハ浦風もなく

久安百首哥に　皇太后宮大夫俊成
忘草つみにこしかと住よしのきしにしもこそ袖ハぬれけれ

恋乃哥中に　典侍親子朝臣
いかにせん身を住の江乃忘れ草におひすてやらん人のなさけ

藤原因氏之
うき人の心乃種の忘れ草いつ我中に蒔り初けん

賀茂経久
うき中ハ枯そめけるとおもひ草なにと涙の露かゝる覧

平時邦
ほりうゑておきし我の種よりもまた秋露そこほるゝ

円蓮法師
うかりける人の心乃わすれ水なと深からぬ契りなるらん

平貞懸
契りしハそれ山乃井の忘るゝも浅かりけりな

大江政国女姉
理りと思ふにつけて恨しきハわかもの涙身なれつゝさへける

藤原経定朝臣
とにかくに忘るゝ身そかゝるなくわれも思ひつゝさされぬる

ガラス使用

権大納言実衡
はなれぬるおもて暮れらぬ世の路にたえぬ中しるらるまし

藤原懐世朝臣
かくちらはけふ絶えなんつらさをもしらでいはねて根ざしけると

よみ人しらず
うらみてもなほひとりこそ理としひとる人さへいかがねたき

今上御製
おもひあくくだすふすればかてもうらむれかとはれてしらん

よみ人しらず
一ともとまるとも袖もそてはいひてきんらのはしかりやしらはおもらん

今上みこの宮と申しける時文首哥合に絶恋
権中納言為藤
よしさらはわすれぬ中もはるかにわかれしらの首なりけると

百首歌奉りし時
藤原為定朝臣
そのつらき思ひは我もひとつなる身のなかにしらすうへの心はしらは

洞院摂政家百首に絶恋
信實朝臣
かるあべき契をそれとは思ひ捨てしこの世をしてて人はうらみし

恋乃哥中に
入道前太政大臣
人もいまさつらさもしらでやうらみん我はらみて四五月日と

平宗宣朝臣よませ侍ける住吉社卅六首
寄年過恋　法印定為
いたつらに人たのめなる年月のつもるとさらに何たのむらん

題しらす　永陽門院少将
忘られぬ逢せはよそになりぬれと名のみして中河のなかれん

権大納言典侍
絶ぬるか絶はひとつのわすれねとも我身はなにとなるらん　古

嘉元百首歌たてまつりし時　忘恋
前大納言為世
しられすたゝ思ひしよりも忘らるゝ秋の人のこゝろそかはりはてぬる

後拾遺恋二　赤染衛門
うらむともいまは
見えしと思ふこそせめ
てつらさのあまりなりけれ

百首歌中に　左大臣
我からのと思ふもうさそかなしけれつらくなりける人の心は

新院御製
つらきをはうきも思はぬ中ならはいかてく人をこひさらまし

題しらす　二品法親王覚助
忘れんと思ふ程こそ忍ふれとつらさもあかぬ心なりけれ

藤原経宣朝臣
つらきをも思ひとらぬ我身しれせめてうらむる心也けれ

藤原秀行
さては又我身なりけりつらしとてむかしに人のうらみしものを

鴨祐敦

除ろすまられ雨けをおし無て思ひつゝ身をかなしみなれぬ

読人しらず

わすられぬうき身なれとも忘れぬ人をつらしと思ひけり

藤原基夏

うき身をはいつまてとて今はたゝ人をうらみぬ命なりけり

前権大納言

忘れ人ありとはうらめしかるへき人のこゝろにたのむらん

寛元内裏百首歌に

前関白太政大臣

新しきはいかにしれわか思ひつゝよすかのほとも思ふらん

百首歌奉りし時

忘られ人のつらさをうらむしはしはうき身なれとも何思ふらむあさき

後九条内大臣家卅首歌に

前大納言為家

うらむるも恋路の外なくておなし涙そせく方もなき

題しらす

権中納言師賢

恨みてもひとりとふともあるせやつらさにたえぬ袖の涙を

よみ人しらす

つれなきもその人からにいやましにいつはりそ絶しら

ガラス使用

平貞直

忘られし後さへ人に忘られて人のつらさは忘れぬかなうき
恨みを

鴨祐夏

命にはかへらまつとすれは我ならぬみよよりかはる心なる

従三位為理

ありて世にあるかひもなき身をしあふをとかさりて我なる

嘉元百首哥奉りし時おなし心を

前大納言有房

（新後撰恋六已出）
命にはつらさにたへぬ身なりせはいける世なからうらみさらまし

恋哥中に

前摂政左大臣

なくふ夢よわれ浦とふ恋ひむかしよ人を思はん

藤原冬隆朝臣

絶ぬしと我心よりおもひすて人のつらさをよそになさし

正三位惟継

さらしもいさて心にまかすれ世のためしからうらみなかれ

平宣時朝臣

つらしともうしともいはし我袖の涙よりこそいろにあらはれん

菅原範秀

我おもふ心のうちをしらせてや人のつらさも恨みそてよし

弁宰相の家小白川に侍りて人〻十首哥講

ガラス使用

しのひし時恨後絶恋

権中納言為藤

うらみてハふりし俤しえのこと又ハ毎にか仲の跡よ

建治三年九月十三夜五首歌に絶恋

山本入道前太政大臣

そのつらき契の末まてとハかりそたのみかけし詞也

百首歌よミ侍けるに恋

皇太后宮大夫俊成

何とかくうらみし人を恨むらんさてもつらさハ海より増
忍しらす

和泉式部

うらみんさ方ハそといへそ涙のかゝるらん

家に歌合し侍ける時恋の心を

左京大夫顕輔

流らうんとの葉そる絶つハ恨てもまことはみせん

ガラス使用

853
166

3224

ガラス使用

ガラス使用